

教科で行うキャリア教育

～学ぶ意欲の向上を目指した授業づくり～

教科・領域 全教科

岩国市立東中学校全学年

キャリア教育の視点による授業改善

社会に出る際に最低限必要なことや、将来を考える際の土台となる意欲・スキルは、日々の教科指導において、教師が意識して工夫を加えることによって高めることができます。そこで、本校では、以下のキャリア教育の視点から日々の授業の改善に取り組んでいます。

- (1) 本時の学習目標・授業の見通しの明示 【キャリアプランニング能力】
- (2) 学習内容や生徒の実態に応じた適切な小集団学習の設定
【人間関係形成・社会形成能力】【自己理解・自己管理能力】【課題対応能力】
- (3) 学習を振り返る場面の設定 【自己理解・自己管理能力】
- (4) 単元末の評価 【自己理解・自己管理能力】【キャリアプランニング能力】

授業づくりの考え方

学ぶ意欲の向上は、キャリア教育と教科内容との関連において、「なぜ学ぶのか」、「どうやって学ぶのか」、「何を学んだか」そして学んだことを「どう使うか」を生徒自身が理解していく過程で期待できると考え、毎時間の授業の流れを、以下のように改善し取り組むことにした。

(1) 本時の学習目標・授業の見通しの明示 【キャリアプランニング能力】

[導入] 「なぜ学ぶのか」を知る

キャリア教育の視点でとらえ直した単元から、生徒が学びの有用性や必然性に気付き、この授業で身に付けるべき能力を知ること、学ぶ意欲を喚起する場面である。

この授業で身につける知識や技能能力が「なぜ」必要なのか、その活用場の例などを伝えることにより生徒がこの授業の学習に有用性や必然性を見出すことになると考えた。

また、新しい学習内容を習得するための見通しをもたせるために、学習の目標を提示するとともに授業の流れを明確にして生徒に提示することとしている。

< 1 時間の授業の流れ >

① 導 入	(1) 目標確認 (目標とのかかわり) ・学習の目標を必ず板書する。 ・授業後に学習が達成できたか確認できるようにする	「なぜ学ぶのか」を知る 【学ぶ意欲の喚起】 *有用性や必然性につなぐ 関心・意欲
	(2) 学習の見通しの共有 (教材とのかかわり) ・授業の焦点化	
② 展 開	(3) 学習課題の明確化 (課題とのかかわり) ・何に気づかせ、何を考えさせ、何を実感させ、 ・何を獲得させたいのか	「どうやって学ぶのか」を考 える 【学び方を身につける】 *いろいろな調べ方を工夫す る *自分の考えと友だちの考 えを比べながら話し合う
	(4) 学習形態の工夫 (友だちとのかかわり) ・目的、方法、内容、人数、メンバー構成、 ・タイミング、時間など	
③ ま と め	(5) 個の学びの時間の確保 (自分とのかかわり) ・学習のまとめ、振り返り→構造的な板書	「何を学んだか」を考 える 【学習のふり返し】 *毎時間、生徒自ら授業をふ り返し、学習内容の有用性や 必然性を高める

(2)学習内容や生徒の実態に応じた適切な小集団学習の設定

【人間関係形成・社会形成能力】【自己理解・自己管理能力】【課題対応能力】

〔展開〕「どうやって学ぶのか」を考える

課題解決においては、適切な小集団での学習活動を取り入れ、友だち同士で意見を「伝え合う」ことで、「様々な考え方」に気付かせる。そして、自分の考えを広げたり深めたりするとともに、その経験を通して学び方を身に付けさせていく。

また、友だちの考え方のよさを伝え合う活動を通して、自分のよさや成長できた点に気づき、学校生活に自信をもって前向きに取り組もうとする意欲を高めていく。



<伝え合い学習の様子>

(3)学習を振り返る場面の設定 【自己理解・自己管理能力】

〔まとめ〕「何を学んだか」を考える

生徒が自ら毎時間の授業の振り返りをする。振り返りは、授業の導入で伝えた学習目標について行い、生徒が学習内容からどのようなつながり（日常生活、将来の役割、過去の学習、他教科等）を見出し、学びの有用性や必然性を得ているかを教師は確認する。また、時には、教師はワークシートを活用し記述させた物をまとめ、全体で共有する機会をもつ。生徒にとって、他の生徒がどのようなつながりを得ているのかを知ることは、新たな有用性や必然性を見出す機会となる。この授業で「何を学んでいるのか」、学びのつながり方を共有し、学びの目的に新たな気づきを得たり、自信を深めたりすることで、望ましい態度や価値観につながると考える。

(4)活用力に重点を置いた単元末の評価の実施

【自己理解・自己管理能力】【キャリアプランニング能力】

〔単元末〕「どう使うか」での学ぶ意欲の評価

学んだことを「どう使うのか」、「社会でどのように役立つのか」など、生徒自身が身の回りのことに置き換えて、望ましい態度や価値観へと向かうよう、単元全体の学習をまとめる工夫を行う。生徒が自分の価値観によって、この単元で学んだことを「どう使うか」につなげられるようにすることが、キャリア教育の視点に立った授業の目的であると考えられる。

実際の授業の様子



<①学習目標の提示>



<②小集団学習>



<③ふり返りの場面>

◆学習指導案例

第2学年 社会科学学習指導案

本時の学習のねらい
(キャリアプランニング能力)

中心的発問(学習課題の意識化)

自分の考えと友だちの考えを比べながら話し合わせる(人間関係形成・社会形成能力 自己理解・自己管理能力 課題対応能力)

ふり返りを基に達成感を味わわせる(自己理解・自己管理能力)

- 1 単元名 日本の諸地域 九州地方
2 主眼 北九州工業地帯の地位が低下した理由を考察することを通して、原料の供給先の変化と国内の製鉄所の立地条件の関係について、理解することができる。

3 展開

	学習活動・学習内容	指導上の留意点(☆評価)
つかむ	1 1935年の工業地帯別の全国に占める生産額の割合を知る。	・各工業地帯の生産額の割合を数値の大きい順に確認させる。
	2 2012年の工業地帯別の全国に占める生産額の割合を知る。	・1935年の統計と比較して、北九州工業地帯の生産額の変化が最も激しいことに注目させる。
	3 本時の学習課題を知る。	
広げる	北九州工業地帯の地位が低下したのはなぜか。	
	(個人→小集団→全体学習)	<ul style="list-style-type: none"> ・個人で課題を考えた後、班で再度意見を考えさせる。ただし、意見を一つにまとめさせない。 ・表出された意見をそれぞれ検証していく。 ・生徒の思考が行き詰まったところで、北九州工業地帯の生産額の内訳を提示し、鉄鋼業の割合が最も減少していることを確認させる。
深める	4 福岡県の鉄鋼業が衰退した要因を、資源の供給先の変化と関連づけながら説明する。	<ul style="list-style-type: none"> ・次の内容が読み取れる資料を提示する。 中華人民共和国の成立と鉄鉱石の供給地の変化 筑豊炭田の閉山と石炭供給地の変化 ・意見が構築できない生徒に対しては、資料から読み取れることを考えさせる。 ・近代の日本と中国の関係、エネルギー革命による石油需要の増加について説明する。 ・1960年以降の福岡県と愛知県に占める鉄鋼生産割合の推移を提示し、福岡県とは反対に愛知県の割合が増加していることを確認させ、その理由を考えさせる。 ・原料供給地(外国)との距離や輸送費が話題になった場合は、実際の数値を提示し、再度意見を考えさせる。
	5 製鉄所を日本のどこに立地するとよいか説明する。	<ul style="list-style-type: none"> ・表出された意見を活用しながら、工業立地と輸送コストの関係を確認する。 ・☆資源の供給先の変化と日本の製鉄所の立地条件の関係を説明できたか。【思・判・表】
つなげる	6 本時の学習内容をふり返る。	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習で発見したことや疑問点を整理させる。時間があれば、発表させ、全体で共有する。